

## 1. 十字架上の七つの言葉

「十字架上の七つの言葉」というのご存知でしょうか。イエス様が十字架にかけられたとき、十字架の上から語られた七つの言葉のことです。十字架上ですからイエス様は死の間際、息も絶え絶えな状態です。その苦しみの中からも、イエス様は七つの短い言葉を語られました。その七つとは次の通りです。

- 1) 父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか、自分でわからないのです。(ルカ 23:34)
- 2) まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。(ルカ 23:43)
- 3) 女の方。そこにあなたの息子がいます。・・そこにあなたの母がいます。(ヨハネ 19:26, 27)
- 4) わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。(マルコ 15:34、マタイ 27:46)
- 5) わたしは渇く。(ヨハネ 19:28)
- 6) 完了した。(ヨハネ 19:30)
- 7) 父よ。わが霊を御手にゆだねます。(ルカ 23:46)

## 2. 赦しとは

イエス様の十字架上での最初の言葉は、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか、自分でわからないのです。」でした。どのことばも重要です。しかし、体力がギリギリの中で発せられる第一声、最初のことばは重みがあると思うのです。この言葉を聞いて感動を覚えない人はいないでしょう。イエス様は、ご自分を苦しめ殺そうとしている人々のために祈り、その人たちを赦しているのです。私たちの住む世界は、「やられたらやりかえせ」という原理で動いています。また、私たちは自分のことには寛容なのに、他の人のこととなると、小さなことも見逃さずに攻め続けます。自分も失敗だらけの人間なのに、人を決して赦さないのはおかしいことなのですが、多くの人はその間違いに気付かないでいます。本当は失敗と弱さだらけで赦されなければならないのは自分であるにも拘わらず人を赦すことにこだわりを持ち続けてしまいます。あるいは居直ってしまって、「私は確かに未熟な人間です。しかし一言言わせてもらいます。」と言い続けます。しかし、イエス様は「目には目で、歯には歯で」という報復の原理ではなく、「右の頬を打つ者に、左の頬も向ける」という赦しの原理で生きられました。イエス様は、ご自分が教えたとおり、右の頬を打つ者に左の頬を向け、敵を愛し、迫害する者のために祈られたのです。

赦しは、善も悪も一緒にしてしまうことでも、何が起こっても平気でいられるずぶとい心を持つことでもありません。赦しは愛です。それは他を受け入れる大きな愛です。

ある人がこんな詩を書きました。

「人々はわたしのまわりに円を描いて  
わたしを締めだした  
けれどもわたしは  
もっと大きな円を描いて  
彼らをとりにこんだ」

イエス様がなされたことはこの詩のとおりのことでした。

イエス様は言われました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか、自分でわからな

いのです。」この言葉は受容の言葉です。イエス様は、自分を苦しめる者たちの苦しみを歯をくいしばって我慢し、「赦したくはないが、赦してやろう」とおっしゃったではありません。イエス様を苦しめた人々は、ほんとうは何をしているのか知っていました。律法学者やサドカイ人はイエス様を殺害する計画を前々から立てていました。祭司長たちは、イエス様に冒瀆罪という、ユダヤの社会で最も極悪な罪に定めようと、お膳立てをしていました。ローマ兵は、ローマの力を人々に見せつけるために、犯罪者をわざと痛めつけました。イエス様の十字架は偶発的に起こったことではなく、綿密に計画されたものでした。言うならば人々は「過失犯」ではなく「確信犯」でした。そして、そのことはイエス様ご自身がいちばん良く知っておられたのです。にもかかわらず、イエス様は「彼らは何をしているのか、自分でわからないのです。」と言って、ご自分を苦しめる者たちさえもかばっておられるのです。

人々はイエス様を憎み、退け、十字架においやりました。しかし、イエス様はその十字架によって、イエス様を憎み、退けた人々を含めてしまうほどのもっと大きな愛の円を描かれ、受け入れられたのです。

人に厳しく当たることを「容赦しない」と言います。「容赦」の「容」は「受容」の「容」です。「容」とは入れ物のことです。汚いものもすべて入れるわけですからその痛みや苦しみも一緒に入ります。人を赦すとは、「容赦する」ことです。愛をもって受け入れることです。それは痛みと苦しみも受け入れることです。イエス様はまさに痛みと苦しみの十字架によって、私たち罪ある者をも受け入れ、赦してくださいました。イエス様の愛は、私たちがどんな状態であろうが、赦し、受け入れてくださる、大きな愛、確かな愛です。イエス様だけが人の罪を赦す権限と力を持っておられるのです。

### 3. 赦されるとは

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか、自分でわからないのです。」との言葉は、イエス様から私たちへの赦しの宣言です。「赦し」というと、私たちはすぐに、自分が人を赦すことを考えてしまいます。ある人は「イエス様がなされたようには人を赦せない」と言って苦しみ、ある人は、自分が他の人を傷つけたり、他の人に迷惑をかけているにもかかわらず、自分は悔い改めないで、「自分は赦されて当然」「なぜあなたは赦さないのか」と、他の人に赦しを強要したりします。

聖書は「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」(エペソ 4:32)と教えています。私たちは他の人を赦す前に、また、互いに赦し合う前に、自分が赦されていないと知らなければならないのです。あるいは主が私を赦して下さることを自覚する必要があります。赦されていない人は決して他の人を赦すことはできないからです。十字架上の七つの言葉の最初のことは、道徳の言葉としてではなく、私たちに罪の赦しを伝える福音の言葉として聞くべきものです。

「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか、自分でわからないのです。」とイエス様が言われた「彼ら」とは誰のことでしょうか。十字架に釘付けにしたローマ兵のことでしょうか。それは、また「十字架につけろ」と叫んだ群衆であり、十字架につけられたイエス様を嘲った人々だったでしょう。この「彼ら」の中には、イエス様を見捨てた弟子たちも入っていたでしょう。そればかりではなく、その「彼ら」には、私たちも含まれているのです。私たちもユダヤの群衆のように、ものごとの真実を求めず、多数の声に聞き従って、真実なお方を斥けてきました。総督ピラトのように正義よりも自分の利益を優先させ、真理であるお方を軽く扱ってきました。ローマ兵のように霊的なことに対してまったく無頓着で、聖なるお方をあなどってきました。イエス様が「彼らをおゆるしてください」と祈られた「彼ら」の中に私たちがいるのです。

水野源三さんの作品に「私がいる」という詩があります。

「ナザレのイエス様を  
十字架にかけよと  
要求した人  
許可した人  
執行した人  
それらの人の中に  
私がいる」

(『わが恵み汝に足れり』より)

「父よ、彼らをおゆるしてください」との祈りは、じつに私たちのための祈りなのです。

では、この十字架からの言葉に私たちはどう答えれば良いのでしょうか。まず第一に「主よ、私を赦してください」と願うことです。私もイエス様を十字架に追いやった人々のひとりだった。それなのに、イエス様は私のために、父なる神にとりなしておられる。自分の罪を認め、神の愛を知り、「主よ、私を赦してください」と、赦しを願う。それが、私たちにできる第一のことです。すべては赦されることから始まります。自分が赦され、受け入れられ、愛されている、そのことを知る人だけが、他の人を赦し、受け入れ、愛することができるのです。

第二に、私たちは、イエス・キリストによって罪を赦されていることを、心から喜び、感謝し、そのことのゆえに神を賛美し、礼拝します。聖書に「多く赦された者は多く愛する」とあります。受けるにふさわしくないほどの赦しの恵みが与えられている。そのことに感動する人は、その恵みに涙するほど喜び、神をほめたたえずにはおれなくなります。

第三に、神の赦しを受けた私たちは、それによって他の人々を赦していくのです。赦しは道德ではありません。それは「人を赦さなければならない」という義務でも、「しょうがないから、お前を赦してやろう」という高飛車な態度でもないからです。自分の、あんなに大きな罪が赦されたのだから、人の小さな過ちを赦すのを当然のこととし、何度も同じ過ちを繰り返すことがあっても、なお、その人を包みこもうとする。それが赦しです。赦しは元々、キリストの赦しから始まっているわけですから私たちが他の人を赦した、赦せたとしても、それは私たちの功績にはなりません。

私たちは誰もその心の奥底に「赦されたい」「赦したい」という思いを持っています。主イエス様だけがただひとり私たちの罪を赦すことのできるお方です。イエス様はその赦しを十字架によって勝ち取ってくださいました。イエス様の十字架は赦しの十字架です。この十字架によって私たちは「赦され、赦す」ことができます。

礼拝は自分の罪を知り、「赦されたい」と願う人々が集うところです。

また礼拝とは人を「赦したい」と願いながら、それをなかなかできないでいる人々が神に助けを求めて集うところです。十字架から流れ出る血潮によって、まず自分自身が赦され、他を赦す恵みの中に生かされていきましょう。